

書評のご案内

美術科教育学会発行の「美術科教育学会通信No.103」（2020年2月20日発行）の新刊案内欄に、本書『今、ミュージアムにできること-せとうち美術館ネットワークの挑戦-』の書評が掲載されています。美術教育や鑑賞教育を専門とする執筆者に焦点を当てた論説です。執筆なさったのは、畑山未央氏です。なお、この情報は美術科教育学会のサイトにおいて、広く一般に公開されています。

新刊紹介

畑山未央(東京家政大学)

『今、ミュージアムにできること-せとうち美術館ネットワークの挑戦-』

(共編:山木朝彦, せとうち美術館ネットワーク事務局)

1. 「せとうち美術館ネットワーク」に向ける編者のまなざし

「せとうち美術館ネットワーク」は、瀬戸内海地域の美術館や博物館などの文化芸術施設をネットワーク化し、地域の交流促進および活性化、子ども達の美術鑑賞教育の普及を図ることなどを目的として2008年10月に発足した。このプロジェクトは、高速道路を維持管理する本州四国連絡高速道路株式会社がメセナ活動の一環として始めた事業で、企業と、アドバイザーである多数の研究者と、そしてネットワークに参加している72の文化芸術施設(2020年1月現在)との共創により、一帯の芸術・文化振興の確実な活性化につながっている。

さて、本書『今、ミュージアムにできること-せとうち美術館ネットワークの挑戦-』は、「せとうち美術館ネットワーク」10周年を振り返り、毎年の取り組みの一環である特別講演会に登壇した演者のエッセイを中心に、アドバイザーらの論考を加えた理論と実践の両面から構成されている。タイトルに込められた意味について、編者の山木朝彦が「まえがき」にて触れているので、その言葉に耳を傾けてみよう。

「急速に浸透し始めたアートマネジメントという領域の言葉を借りるなら、『今、ミュージアムにできること』の中心に、〈地域の魅力を活かした鑑賞者開発〉という課題を捉え、さらなる発展を目指すことこそ、本ネットワークの挑戦になるはず。それはまた、今世紀前半、世界のミュージアムが取り組むべき共通の挑戦になるでしょう。」

学習観や知識観が変化する時代の中で、文化芸術施設の教育・普及機能も地域市民の多様な学びや「ウォンツ」、複雑化する社会情勢などに寄り添いながら、経験や学習や価値をどのように生み出すかへと役割を変えつつある。その役割は、人とモノの結びつきを越え、地域の特徴や館固有のリソースなどを媒介に人と人とを結びコミュニケーションのデザインとも言えるかもしれない。

2. 本書の内容

本書の章立てと、それに基づく豊かな論考についてピックアップしてみる。紙幅の関係上、全ての論考に触れることが困難なのが心苦しいが、各タイトルが非常に有意義なので、是非お手にとってご覧いただきたい。

第1章は美術館内で創出された実践に関する論考である。大原美術館、平山郁夫美術館、兵庫県立美術館、大分市美術館、岡本太郎美術館、世田谷美術館、東京国立近代美術館、板橋区立美術館の各館における歴史的な文脈や教育普及プログラムの取り組みなどについて、来館者の学びのプロセスを辿りながら詳細に語られている。

第2章は、地域や学校とつながる美術館の実践事例に関する論考である。宮脇理は、横浜美術館子どものアトリエの構想・発足・運営の道程を追いながら、時代の節目に関わった人々の意識を描写し、いまの美術館教育に目を向けている。横浜国立大学の修士課程創設期に宮脇が果たした役割の大きさが理解できるとともに、当時の院生達が、今で言うアクティブ・ラーニングを行なっていたことにも気付かされる。濱口由美は、徳島県立近代美術館との連携による鑑賞学習教材の開発から実践に至るまでの取り組みや福井市美術館との共同による「多言語ストーリーテリング」のプロジェクトなどの成果を鑑み、「他者と共に育つ鑑賞教育」の提案を行っている。高松智行は、自身の教員としての多忙な日常の軸を「外界」へ移行すべく駆け込んだ美術館での鑑賞体験を基に、そこでの価値を目の前の子ども達と共有することで得られた教師と子ども間の新たな関係性と意義について、教師が抱える現状に寄り添う目線で論じている。井上由佳は、ミュージアムをつなぐネットワークに着目し、日本と英国の事例と役割を比較しながら「せとうち美術館ネットワーク」の意義に立ち返り、今後は人と人をつなぐ人的交流が必要であると展望している。山木朝彦は、英国のテイト・ギャラリーの歴史的な文脈を概括しつつ、TATEが有する教育機能の媒体や方法について詳細に紹介している。とりわけ、美術分野だけでなく、他教科の領域まで架橋する教材、ミュージアム連合体が運営するプロジェクトを通じた参加者の社会的認識の深化のあり様などを「せとうち美術館ネットワーク」の今後と結びつける慧眼に読者は多くを学ぶであろう。

第3章は、ミュージアムのネットワークトポロジーの論考である。前田ちま子は、かつての自身の米国調査で聞いたHands-on、

workshop, VTS (Visual Thinking Strategies) の理念や実践を時系列で追い、日本の美術館教育や学校との連携への影響を論じている。美術館教育の様相を迷いの森に喩え、出口の開かれた可能性を俯瞰する流れに我々読者は引き込まれる。赤木里香子・山口健二は、社会教育機関とされる我が国の美術館に従事する学芸員専門性の高さが大学教員のそれと相同性が高まっているとしつつ、一方で両者の「奉仕すべき対象」が異なるがゆえに、美術館の学習者支援が多岐にわたることをわかりやすく明らかにしている。同時に、モノを起点とする美術館の教育支援の意義を改めて我々に突きつけている。

第4章は、アートとデザインの鑑賞、創作、研究のための理論的論考である。徳雅美は、美術教育の理念や芸術スタンダード、教員養成プログラムなどについて日米を比較した論考を行い、自身の研究テーマである「描画と美意識の発達の比較研究」につながら、描画発達に現れる普遍性と文化的特異性の考察を展開している。渡辺邦夫は、「デザインとは何か?」という問いから、自身の代表的なデザイン実例として「海バス」、「環境保護ポスター/平和ポスター」、「色相環の絵の具の開発」などを紹介・解説し、読者を見事に「デザインの真理」へと導く。そして美術館の役割にデザインを組み込むことへの次なる問いかけを我々に提示している。三根和浪は、「せとうち美術館ネットワーク」を構成する諸施設や活動内容の性格的側面から、その核心は「美術鑑賞」であるとし、まずは鑑賞の構造や発達段階など多角的アプローチから学術的に論じている。その論考に基づき、鑑賞の授業における工夫の観点について我々が享受する機会を提供している。佐二木健一は、生命科学を研究する理系の立場から、工芸教育の重要性を説く。「科学技術が圧倒的な力を持つようになる中で、より良い未来のためにそれを使いこなす人間性が、これからは決定的に重要になってきます」という佐二木の言葉にリンクするように語られる「やちむん」(沖縄で400年以上の歴史をもつ伝統工芸)との出会いのストーリーは、美術教育に携わる我々に、頼もしくそして説得力をもって響いてくる。金子宜正は、自身の研究の一環であるベルリンの「イッテン・シューレ」でのヨハネス・イッテンと日本人の相互交流について、その事実を剔抉していく研究プロセスをエッセイ形式にまとめている。また、調査の過程で活用した欧州の美術館や資料館等の文化施設の利用のしやすさや機関同士の連携の充実にも触れ、それらが一般に開かれた文化的施設だけの機能にとどまらず、研究者たちをつなげ、新たな研究を発信するプラットフォームの役割も担っていると結ぶ。

3. 魅力の所在

我々が手にする博物館や美術館に関する書籍、とりわけその教育に関する我が国の論考は、理論に基づく内容や各施設の実践事例の紹介というコンテキストが主流な印象である。それを踏まえ、本書を読むにつれて、それらのコンテキストに研究者・学芸員や来館者、教師、子ども達の生々しい息づかいがエッセンスとして加わっている感覚を憶えることができる。言い換えれば、我が国のミュージアム教育の論考の慣例的なアプローチを越えて、実践家の思惑と来館者の感受や行為の関与が相互作用的に結実していきながら場の意味が形成されていく過程をこそ丁寧に描写しているのである。

本書は「せとうち美術館ネットワーク」の様々な取り組みに関するドキュメントを論の核としながら、関係者の専門知と経験知の相互作用によってプロジェクトの意義を理論的に強化している労作である。尚且つ、著者それぞれの「せとうち美術館ネットワーク」に対する期待と展望の眼差しが、地域の魅力を活かしたネットワークデザインのあり様を考える機会を我々に提供してくれる。「せとうち美術館ネットワーク」が発足して10年を越え、またこの先の10年を考える契機となる本書。アートと地域を結ぶマネジメントの取り組みの中で、市民が地域のよさに触れ、気づき、そしてその共同体の中で活動が認知されて広がっていくという向上的な循環の先に見えてくるのは、きっと紛れもなく〈地域の魅力を活かした鑑賞者開発〉だと思う。

下記に本書への敬意を込めて執筆担当者を掲載します。

◆編者

山木 朝彦、せとうち美術館ネットワーク事務局

◆著者(五十音)

赤木 里香子、伊藤 周雄、今井 陽子、井上 由佳、大原 謙一郎、金子 宜正、栗原 祐司、酒井 孝志、佐二木 健一、菅 章、高松 智行、塚田 美紀、徳 雅美、仲野 泰生、野呂田 純一、濱口 由美、平山 助成、弘中 智子、前田 ちま子、三原 修二、三根 和浪、蓑 豊、宮脇 理、守田 庸一、山口 健二、山木 朝彦、山下 治子、渡辺 邦夫

◆出版社:学術研究出版 ◆ISBN:978-4-86584-439-9 ◆出版日:2019年11月20日 ◆価格:1,600円+税